日建新聞2014年9月号

「都市のワークプレイス」開催　芝浦アーバンデザイン・スクール　学生作品展覧会

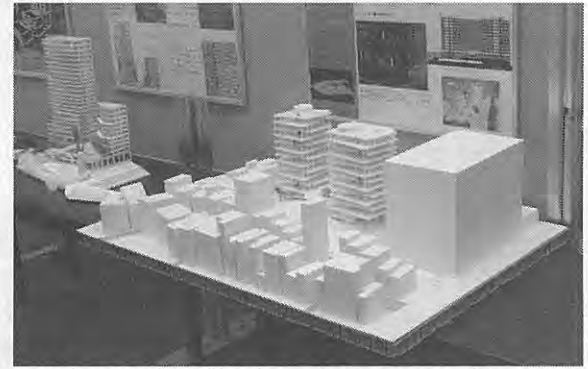
東京都港区の芝浦工業大学芝浦校舎玄関ホールを会場として５月31日から２週間、芝浦アーバンデザイン・スクールの学生作品展覧会が開催された。

この展覧会は、同大学デザイン工学部のデザイン工学科建築・空間デザイン領域の学生が取り組んだプロジェクト演習「都市のワークプレイス」の成果を展示したもの。会期中は、学内だけでなく、港区の行政関係者や大学周辺の住民など、学外から見学に訪れる人の姿も見られた。

芝浦アーバンデザイン・スクールは、芝浦工業大学デザイン工学部と地域が連携し、都市の魅力を再発見するために進めているプロジェクト。文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の一つとして採択され、2013年度にスタートした。すでに実施されたものとして、「地域の建築から学ぶ設計演習」がある。これは、港区指定文化財「旧協働会館」の活用をテーマに、学生がアイデアとデザイン案を出し、行政や地域住民からの講評を受けたもの。また「水辺の都市」をテーマにした公開講座も３回にわたって開催された。

今回、作品展覧会が行われたプロジェクト演習「都市のワークプレイス」は、多くの都市生活者が一日の大半を過ごすオフィスを周辺環境と合わせてデザインすることが課題。履修生全員に留学生、教員も加えた55名が取り組み、その成果が図面と模型で発表された。

「これまでは研究室が地域の街づくりにアイデアを出すということはありましたが、正規の授業の中で地域を対象にした課題に取り組み、その成果を地域に公開するという試みはありませんでした」とデザイン工学部長の篠崎道彦教授。それだけに学生にとっても緊張感のある取り組みになり、また、地域の課題をどう組み込むことができたか、その評価を実際の声として知ることができる貴重な機会になったという。



芝浦工業大学芝浦校舎玄関ホールを会場に開かれた学生作品展覧会。55点の力作が並んだ

芝浦工業大学デザイン工学部は、「工学と人間の感性および社会との調和・融合を図りながら創造的なものづくりの力をもった人材の育成」を目標に2009年に開設された。その目標にふさわしい実践的な教育の場のひとつが「芝浦アーバンデザイン・スクール」といえる。スクールの活動は、来年度に向けさらに続けられる予定だ。